

日本英文学会中部支部  
第71回大会プログラム

---

研究発表・シンポジウム要旨

日 時：2019年10月26日(土)

会 場：三重大学

(〒514-8507 津市栗真町屋町1577)

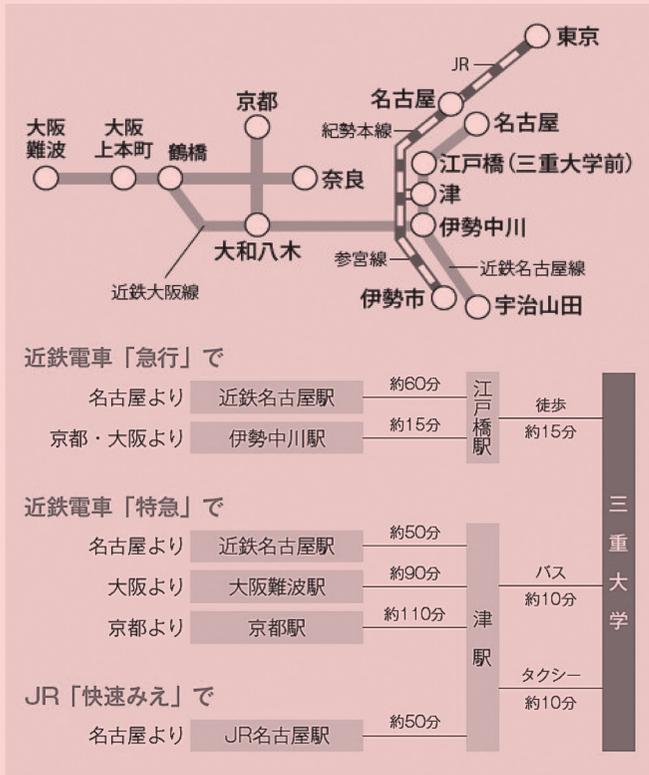
日本英文学会中部支部事務局

〒514-8507 津市栗真町屋町1577  
三重大学人文学部 小田敦子研究室内

E-mail: [chubu@elsj.org](mailto:chubu@elsj.org)

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

## 三重大学へのアクセス方法



### 津エアポートライン(高速船)

中部国際空港 — 津なぎさまち (40分)

- 三交バスで「津なぎさまち」から「津駅前」まで約15分、「津駅前」乗り換え「三重大学前」まで約10分
- タクシーで津なぎさまちから三重大学まで約15分

### バス

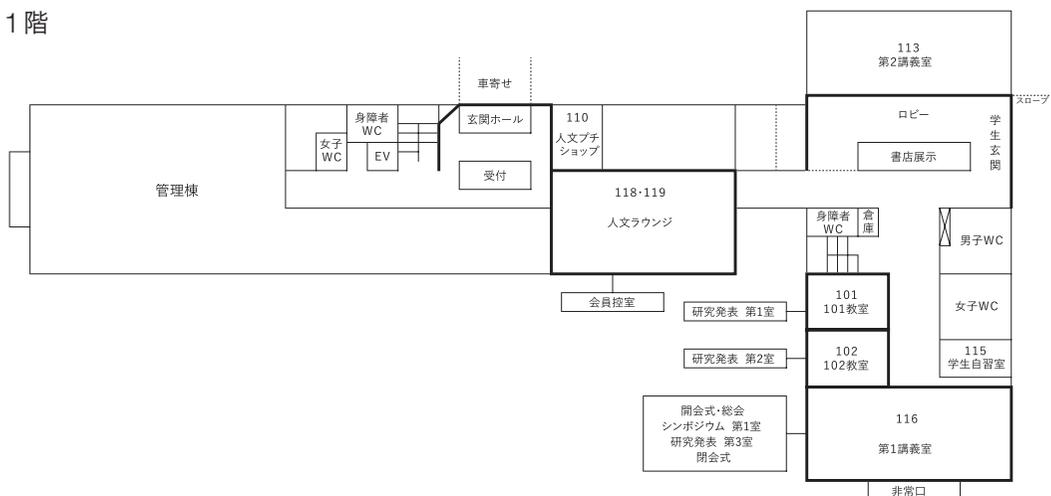
津駅前バスのりば「4番」から三交バス「白塚駅」「千里駅」「三重病院」「棕本」「豊が丘」「サイエンスシティ」「高田高校前」「三行」行きで「三重大学前」下車。

## 三重大学キャンパスマップ

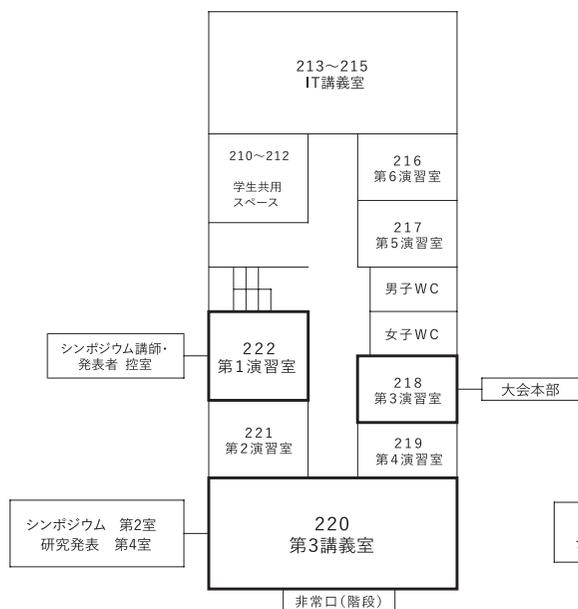


## 会場案内図

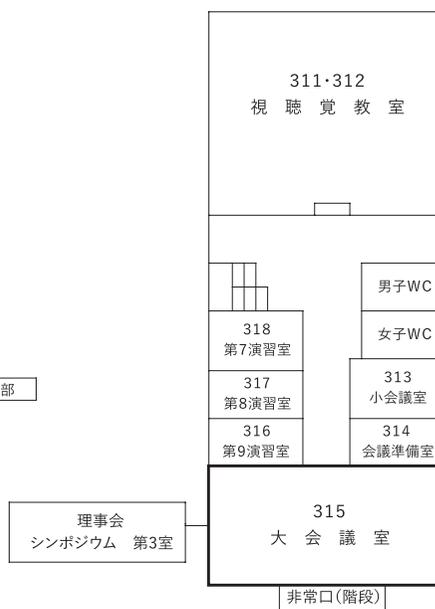
### 1階



### 2階



### 3階



受付： 1階玄関ホール  
 開会式・総会・閉会式： 1階第1講義室  
 理事会： 3階大会議室  
 会員控室： 1階人文ラウンジ  
 シンポジウム講師・発表者控室： 2階第1演習室  
 書店展示： ロビー

シンポジウム第1室(イギリス文学)： 1階第1講義室  
 シンポジウム第2室(アメリカ文学)： 2階第3講義室  
 シンポジウム第3室(英語学)： 3階大会議室  
 研究発表第1室(イギリス文学-1)： 1階101教室  
 研究発表第2室(イギリス文学-2)： 1階102教室  
 研究発表第3室(イギリス文学-3)： 1階第1講義室  
 研究発表第4室(英語学・アメリカ文学)： 2階第3講義室

## 開催校からのお知らせ

### 【ご入構について】

江戸橋駅から徒歩の場合は、大学病院前交差点から構内の車道沿いにお進みください。  
バスは「三重大学前」で下車が、「大学病院前」下車より少し歩く距離が短いです。大学病院行きの場合は終点「大学病院」で下車、これがいちばん近いのですが、本数が少ないです。  
お車の場合は、大学正門横の駐車場をご利用ください。大学病院の駐車場は有料です。

### 【食事場所について】

大学病院内12階の中華レストラン四喜折々(しきおりおり)、1階ドトールコーヒーをご利用ください。大学病院周辺、国道23号線を挟んだ向かい側にいくつか和洋レストランがございます。Googleマップ等でご確認ください。

### 【周辺のコンビニ情報など】

三翠ホール前にミニストップ(食事用のテーブル席有)、大学病院内にはローソンがございます。

### 【開催校からのお願い】

喫煙は指定の場所をお願いします。

## 懇親会の申込み方法

懇親会にご出席の方は、以下の申込みフォームからご連絡ください。申込みフォームへは中部支部ホームページからもアクセスすることができます。多くの方のご参加をお待ちしております。

懇親会申込み用フォーム：<https://forms.gle/jw5kNTpg8twUcsVC8>

## 日本英文学会中部支部第71回大会プログラム

日 時：2019年10月26日(土)

場 所：三重大学 (津市栗真町屋町1577)

大会受付 12:20より (人文学部 1階 入口)

開会式 12:45～12:55 (人文学部 1階 第1講義室)

開会の辞 日本英文学会中部支部長 宮地 信弘

開催校挨拶 三重大学理事・副学長 山本 俊彦

総会 12:55～13:20 (人文学部 1階 第1講義室)

シンポジウム 13:30～15:40

第1室(イギリス文学) 人文学部 1階 第1講義室

『英文学と〈協役〉』

司会・講師 吉野 由起 (三重大学准教授)

講師 田中 綾乃 (三重大学准教授 西洋哲学・演劇論)

講師 滝川 睦 (名古屋大学教授)

講師 小山 太一 (立教大学教授)

第2室(アメリカ文学) 人文学部 2階 第3講義室

『エマソンの影響 ―文学から自己啓発本まで―』

司会・講師 小田 敦子 (三重大学教授)

講師 堀内 正規 (早稲田大学教授)

講師 野田 明 (三重大学教授)

講師 尾崎 俊介 (愛知教育大学教授)

第3室(英語学) 人文学部 3階 大会議室

『英語史における「線引き」の再考 ―名詞・代名詞が関わる現象に着目して―』

司会・講師 小塚 良孝 (愛知教育大学准教授)

講師 柳 朋宏 (中部大学教授)

講師 茨木正志郎 (関西学院大学准教授)

研究発表 第1発表 15:50～16:15 第2発表 16:20～16:45

第3発表 16:50～17:15

第1室(イギリス文学) 人文学部 1階 101教室 16:20～17:15

第2室(イギリス文学) 人文学部 1階 102教室 16:20～17:15

第3室(イギリス文学) 人文学部 1階 第1講義室 15:50～16:45

第4室(アメリカ文学) 人文学部 2階 第3講義室 16:20～17:15

第4室(英語学) 人文学部 2階 第3講義室 15:50～16:15

閉会式 17:20～17:30 (人文学部 1階 第1講義室)

閉会の辞 日本英文学会中部副支部長 鈴木 達也

懇親会 17:50～19:20 翠陵会館パセオ (会費4,000円)

## 研究発表一覧

### 第1室(イギリス文学)

人文学部 1階 101教室

司会 服部 厚子(鈴鹿医療科学大学教授)

- 『十二夜』における異性装とジェンダー・クライシス  
谷ノ上 千奈美(名古屋大学大学院)
- The Jew of Malta*におけるBarabasの財宝欲と  
マキャヴェリズム  
奥山 厚子(名古屋大学大学院)

### 第3室(イギリス文学)

人文学部 1階 第1講義室

司会 川津 雅江(名古屋経済大学名誉教授)

- シャーロット・ブロンテの小説における兄弟間の  
確執のモチーフとその起源  
古野 百合(鈴鹿工業高等専門学校講師)
- The Moral Dilemmas of the Hero Thiodolf in  
William Morris's *The House of the Wolfings*  
秦野 康子(名古屋大学大学院)

### 第2室(イギリス文学)

人文学部 1階 102教室

司会 丸山 修(静岡大学教授)

- イーヴリン・ウォーと第二回ヴァチカン公会議  
有為楠 香(名城大学非常勤講師)
- The Bachelors*における'stranger'としてのRonald  
畑中 杏美(弘前大学講師)

### 第4室(英語学・アメリカ文学)

人文学部 2階 第3講義室

司会 吉田 江依子(名古屋工業大学教授)

- 動詞句内要素の等位接続について  
梶本 顕士(北海道教育大学准教授)  
中村 太一(福井大学准教授)
- 司会 柳沢 秀郎(名城大学准教授)
- 日米における国民作家フォークナーの創生  
—*Faulkner at Nagano*からみる合衆国の文化外交戦略とその受容—  
森 有礼(中京大学教授)
  - ロスト・イン・トランスレーション(翻訳において失  
われるもの) —『ティファニーで朝食を』の場合—  
楚輪 松人(金城学院大学教授)

## シンポジウム・要旨

第1室(イギリス文学) 人文学部1階 第1講義室

### 英文学と〈脇役〉

|       |         |                    |
|-------|---------|--------------------|
| 司会・講師 | 三重大学准教授 | 吉野由起               |
| 講師    | 三重大学准教授 | 田中綾乃<br>(西洋哲学・演劇論) |
| 講師    | 名古屋大学教授 | 滝川睦                |
| 講師    | 立教大学教授  | 小山太一               |

物語の構成上、脇役はしばしば不可欠の役割を果たす。その例は *Don Quixote* の Sancho Panza に Rocinante、*The Tempest* の Caliban や Ariel に留まらず、特定の時代やジャンルに限局してみられるものでもなく、英文学の歴史とも表裏一体の歴史を持つといえよう。作品を離れ独り歩きする脇役像も存在し、広く知られている *The Pickwick Papers* の Sam Weller と Sancho Panza の関連性が示唆するように、脇役像の借用や再話も珍しい出来事ではない。現代では1966年8月に Tom Stoppard による *Rosencrantz and Guildenstern Are Dead* が初演され、10月に Jean Rhys の *Wide Sargasso Sea* の刊行が続き、フィクション作品における脇役に斬新な可能性を与え、脇役をめぐる新たな議論の場を提供する契機となった。以降時間が経過したが、個別の作家や作品論の手段として登場人物論を含む先行研究例こそ豊富に存在するものの、〈脇役〉を主要な関心事とする研究は未だに多いとは言えない。〈脇役〉や、それに類する用語を含まない批評用語集が大半を占める現状は、脇役と重なり合う部分もあるが、用語として盤石に確立されて久しい subgenre や subplot をめぐる趨勢とは対照的といえる。英文学における脇役論、すなわち脇役像の系譜や典型の形成と変遷、作者による脇役観や脇役の造型法、主人公や同時代の人間観との関わり、物語の構造や展開上担う機能や象徴的意義、メタフィクションやパロディとの関わり等の諸問題を検証することに、可能性はあるのだろうか。以上の問いを意識しつつ、本シンポジウムは時代、ジャンル、学問領域を横断し、様々な角度から脇役論を試みる。

### 〈脇役〉とは何か?——「主と奴の弁証法」的關係を手がかりに

田中綾乃

野田秀樹演出のオペラ『フィガロの結婚』(2015年上演)は、「庭師は見た!」という副題がつけられ、ボーマルシェの戯曲では〈脇役〉(端役)でしかない庭師を進行役として登場させ、庭師の視点で物語が展開する新演出として話題を呼んだ。また、杉原邦生演出『オイディプス REXXX』(2018年上演)では、ギリシャ悲劇に登場するコロスに個性をもたせることで、オイディプス王の悲劇を現代の私たちの物語として描いた。このように、主役(主人公)の視点からではなく、〈脇役〉の視点からその作品を捉え直すという作業は、現代の演出や戯曲の読み方としてよく用いられる方法である。

ところで、主役と対概念の〈脇役〉とは、主役を助ける副次的な役割の「傍役」から物語の進行に直接的には関わらない「端役」まで、その射程は広い。それ故、何を以て〈脇役〉とするのか、

その内実がわかりにくいように思える。本発表では、能に登場するシテとワキの構造に着目しながら、〈脇役〉の機能について明らかにすることを試みる。その際、ドイツの哲学者ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法の議論を用いながら〈脇役〉の意義について考察を深めていきたい。

### ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ? —— シェイクスピアと〈脇役〉の伝統

滝川 陸

ブリューゲル (Pieter Bruegel the Elder) の『イカロスの墜落のある風景』(*Landscape with the Fall of Icarus*, 1556–58?)。主役であるはずのイカロスは、海に沈みゆく、その両脚のみが描かれ、画面手前には犁を動かす、脇役たる農夫が大きく描かれている。シェイクスピア (Shakespeare) 劇には主客を転倒させる、このようなブリューゲル的瞬間が描かれる。脇役が前面にせり出しはするものの、主役が舞台から消えることもない、二重の焦点を結ぶ、いわば「楕円幻想」(花田清輝 『復興期の精神』)。

『お気に召すまま』(*As You Like It*, 1599–1600) のアダム (Adam) 役、『ハムレット』(*Hamlet*, 1600–01) の亡霊役などの脇役を自ら演じたと伝えられるシェイクスピアは、本発表の主題のように「〈脇役〉は死んだ?」と問われれば、すかさず「否」と答えたであろう。

本発表のねらいは、古代ローマ喜劇からシェイクスピア劇にいたる「脇役」の伝統を明らかにすることである。

### こんな男とつき合うのはやめなさい —— ジェイン・オースティンにおける〈色男〉の系譜

小山 太一

見覚えがよくて如才がなく、社交的だが実は人格に問題が多々ある、という男たちが、Jane Austen の小説にはしばしば重要な脇役として登場する。オースティンの小説のヒロインたちにとって、そうした男たちのうわべの魅力に騙されないだけの人間知と世間知を身につけることが、彼らに比してより誠実な精神と人生設計の能力を備えた男を夫として手に入れるという社会的成功のための重要なステップとなっていることは疑いえない。

しかし、オースティンによって「こんな男とつき合うのはやめなさい」という事例にされた——あるいは、ヒロインが男選びの知恵を獲得するプロセスのだしにされた——色男たちには、まったく何の言い分もないのだろうか。どうして彼らは、人生を設計するという発想を持たない(ように見える)のだろうか。*Pride and Prejudice*、*Mansfield Park*、そして *Emma* を題材に〈色男〉たちの生活と意見を検討してみたい。

### スコット『アイヴァンホー』—— 歴史小説と〈脇役〉

吉野 由起

タイトルとは裏腹に、『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*, 1820) は〈主役〉アイヴァンホーの存在感の希薄さと、生命力に溢れ、あくの強い〈脇役〉たちの織り成す緊張関係が際立った特徴を成す作品である。物語序盤を留守にしており、登場後も正体を隠し、騎士間の試合後に倒れてしまう、一見受動的な印象を与える主人公は、先行研究で指摘されている、作家スコットが意識的に展開した、歴史小説というジャンルと緊密に関わる主人公の造型法の特徴を示す一例とみることは可能であろう。

『アイヴァンホー』でも伝説や歴史に語り継がれる人物の借用である脇役たちと、スコットに

よる純粋な創作である架空の、そして無名の脇役たちが、多声的に物語を紡ぎあげ、動かしている。同作品における〈脇役〉の造型と用法が、スコット自身がhistorical romanceと呼んだ、歴史小説としての同作品にいかに関わるかという点を検証したい。

## 第2室(アメリカ文学) 人文学部2階 第3講義室

### エマソンの影響 —文学から自己啓発本まで—

|       |          |       |
|-------|----------|-------|
| 司会・講師 | 三重大学教授   | 小田 敦子 |
| 講師    | 早稲田大学教授  | 堀内 正規 |
| 講師    | 三重大学教授   | 野田 明  |
| 講師    | 愛知教育大学教授 | 尾崎 俊介 |

ユニテリアンの牧師職を辞したエマソンが1836年に*Nature*を発表したときには、まだピューリタニズムの思想が浸透しており、エマソンの進化論的な自然観が当時の人々に理解され受容されていたわけではない。Self-Relianceの考え方についても同様で、エマソンはあらゆる講演で唯一のこと、“the infinitude of the private man”(1840年日記)を伝えようとして、多くの場合成功したが、宗教の話になると拒否されると述べている。しかし、エマソンの説教や講演は人気を博し、50年代になるとアメリカで最初の「パブリック・インテレクチュアル」の地位を確立していく。Lawrence Buellの優れた入門書*Emerson* (2003)は、エマソン研究の従来にない方向として「パブリック・インテレクチュアル」として広範な分野に影響を与えたエマソン、国民的アイコンにとどまらない世界的な影響力を挙げた。

本シンポジウムも、エマソンの広範な影響力に注目する。人々を捕えた「コンコードの賢人」としてのエマソンは長らく文学研究では不遇であったが、そのエマソンの「人格」のもつ力と最近の研究の「脱超絶主義化」された高度な文学批評に耐えるエマソンをつなぐことはできないか、試みてみたい。文学者から一般大衆まで、そこにはエマソンの目指した多様なものの同一性と言えるようなエマソンの思想の展開があるのだろうか。誤読、反発、単純化やアイコン化など、エマソンのテキストの理解からは逸れた部分をも含めて、エマソンという存在の大きさが浮き彫りになれば幸いである。

### パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン

小田 敦子

エマソンの思想はコンコードの地と密接に関わって展開された過激な思想であったが、1848年にイギリス講演旅行から帰国後は、領土問題や奴隷制の議論においてパブリック・インテレクチュアルとして発言を期待されるようになり、講演旅行もニューイングランドに止まらず、中西部、西部へと広がっていく。1850年以降に出版されたエッセイ集、*Representative Men, English Traits, The Conduct of Life*は、偉人伝、紀行文、処世訓の体裁をとることでより広範な読者を獲得した。初期のエッセイに伏流する人間は大地や空の“public child”(“Woodnotes I”)であるという自然への新しい見方、エマソンが自然の法であると考えた“Compensation”の思想を、深くは理解されないとエマソン自身が認識していた聴衆や読者に対して、どのように伝えようとしたか、1850

年代の講演から発展していった *The Conduct of Life* 中の “Power” や “Wealth”、“Behavior” などのエッセイから、エマソンの試みた複数のレベルでの “public” なものへの挑戦を考えてみたい。

## エマソンとホイットマン——〈詩人〉の立ち位置と〈自己〉の様態

堀内正規

エマソンからホイットマンへ。見やすいようにも思えるこの〈影響〉のラインは、実際にはどのような意味で〈影響〉と言えるのか。具体的に双方のテキストをつき比べながら、なるべく精読の手つきを保ちつつ検討してみたい。ホイットマンが詩人になる以前に直接聴いたエマソンの講演の発展形であるエッセイ「詩人」(“The Poet”)。それが『草の葉』(とりわけ初版から第三版まで)の「詩人ホイットマン」の自己像の提出とどうつながっているかをまず瞥見する。ついで、ホイットマンの〈自己〉のあり方の問題。“Song of Myself” における〈自己〉は普通の意味での「自我」(ego)とは明らかに異なっているわけだが、そこにエマソンの〈影響〉を看取できそう。その検討を、主にエマソンの「自己信頼」(“Self-Reliance”)との比較を通してしてみよう。いずれにおいても、ホイットマンがどこでエマソンから離反して、〈彼自身〉になっているのかを提示できたらと思っている。最終的には *Calamus* 詩群を大切に考える地点に行き着きたい。

## エマソンとメルヴィル——先行者への意識

野田明

従来メルヴィルはエマソンの楽観主義に対する批判者と解されることが多かった。実際、『信用詐欺師』の登場人物マーク・ウィンサムはエマソンの戯画として知られる。しかし、ボストンで初めてエマソンの講演を聞いた時のメルヴィルの反応はすべてが否定的な調子というわけではなかった。ダイキック宛ての手紙にはエマソンに対する強い意識、両価感情がある。メルヴィルがエマソンの致命的な欠陥として挙げる「この世の初めに生まれていたら何か価値のある言葉を吐けたらう」ということ、つまりオリジナリティーの問題は、同じ手紙の冒頭に「いや、私はエマソンの虹のブランコには揺られません。」とあるように、メルヴィル自身が抱えた問題ではなかったのだろうか。原初のものに対する意識、先行するものへの関わり方をエマソン、メルヴィルを繋ぐ鍵として、それぞれの著作に探りを入れていきたい。

## 自己啓発本の中のエマソン

尾崎俊介

日本の大学から「文学部／英文科」なるものが消滅しつつある今日、この国でエマソンのことを一番よく知っているのは、案外、働き盛りのサラリーマンかも知れない。事実、書店に行き、「自己啓発本」コーナーをひとわり眺めてみれば、そこに何種類もの『自己信頼』の邦訳が並んでいることに気づくはずだ。日本のサラリーマンたちは、あたかも栄養ドリンクを一気飲みするがごとく、日々エマソンの格言のごとき文章を拳拳服膺しながら世過ぎをしているのである。そしてこの現象は日本だけのことではなく、アメリカにも当てはまる。とすれば、これもまたエマソンの「影響」と言えるのではないか？

本シンポジウムにおいて論者は自己啓発本の研究者として、日本及びアメリカの自己啓発本の中でエマソンの諸言説が盛んに引用されている実態を報告したい。その上で、この種の(下世話な?)「影響」をどう捉えるべきか、エマソンを専門に研究されている方々と共に検討していけれ

ばと考えている。

### 第3室(英語学) 人文学部3階 大会議室

## 英語史における「線引き」の再考 —名詞・代名詞が関わる現象に着目して—

|       |           |       |
|-------|-----------|-------|
| 司会・講師 | 愛知教育大学准教授 | 小塚良孝  |
| 講師    | 中部大学教授    | 柳朋宏   |
| 講師    | 関西学院大学准教授 | 茨木正志郎 |

言語学において、線引きは重要な作業である。観察対象の言語をより正確に理解するためには、その言語内の要素や現象の間にどのような境界があり、どのような範疇が形成され、範疇同士がどのような相互関係にあるかを明らかにする必要がある。しかし、その見極めは母語に関してさえも必ずしも容易ではなく、直観も資料も不十分な古い言語においては尚更難しい。それゆえ、史的言語研究では、あるはずの区別が見落とされたり、逆に、不要な区別がなされやすい。本シンポジウムでは、名詞・代名詞に焦点を絞り、従来の「線引き」を再考する必要があると思われる事象をいくつか取り上げ、その適切な解釈を探る。

小塚は、古英語における三人称代名詞と指示代名詞 *se* (*seo*, *þæt*) の相互関係を取り上げ、特に北部方言の文献に境界の曖昧性が認められること、また、その曖昧性が *they* の発達に繋がった可能性を論じる。柳は、古英語・中英語における否定的不定辞 (*nænig/nanig* ‘not-any’, *nan/no* ‘no’) を取り上げ、同じ「否定的不定辞 + NP」でも、共起要素に応じて統語的振舞いの上で異なるカテゴリーに属する可能性を指摘する。茨木は、*of* 属格を取り上げ、*a friend of mine* のようないわゆる後置属格 (*post genitive*) が、構造的に他の *of* 属格とは一線を画すことを論じる。

### 後期古英語における三人称代名詞と指示代名詞の境界 —*they* の発達との関わり—

小塚良孝

*they* (*their*, *them*) は古ノルド語からの借入語だという見方が定説であるが、その一方で古英語の指示代名詞 *se* (*seo*, *þæt*) からの発達だという見方もある。最近、後者の見方に関わって、古英語の三人称代名詞と指示代名詞の相互関係に関する詳細な調査がなされ始めたところであるが (e.g. Cole, 2018; Kozuka, 2017, 2018)、まだ十分とは言えない。そこで、本発表では、特に後期古英語において三人称代名詞と指示代名詞がどのような相互関係にあったのかを、方言や時期の異なるいくつかの文献の調査結果を基に改めて検討する。それにより、後期古英語の三人称代名詞と指示代名詞は、特に北部方言では一定の条件下で境界がかなり曖昧になった可能性、また、そのことが *they* の発達に寄与した可能性を論じる。

### 古英語・中英語における否定的不定辞の NPI と NQ の境界 —目的語の語順を中心に—

柳朋宏

古英語・中英語には否定辞のほかに否定的不定辞が生起しても文全体では否定の解釈となる「否定呼応」とよばれる現象が存在した。否定的不定辞は単独で否定の意味をもつ一方、否定辞と共に

起した際には否定の意味が打ち消される (Blanchette, 2015, 2016; Ingham and Tubau, 2019)。従来の研究では否定の解釈に焦点があてられることが多かったが、本発表では否定的不定辞を含む目的語と動詞の相対語順という統語的特性を分析対象とする。柳 (to appear) では、否定呼応文における否定的不定辞 *nænig* ‘not-any’ を伴う目的語は、否定目的語ではなく、数量化目的語の分布に近いことを論じた。本発表では調査対象を広げ、動詞と目的語の相対語順の違いから、否定的不定辞は否定呼応文では否定極性項目 (Negative Polarity Item; NPI) として、否定辞を伴わない文では否定数量詞 (Negative Quantifier; NQ) として機能していた可能性について論じる。

## of 属格と後置属格の境界

茨木 正志郎

of 属格は後期古英語に出現し中英語に広く使われるようになった。of 属格に関する構造に、後置属格 (*a friend of mine*) と呼ばれる構造があり、後置属格は of 属格が広く使われるようになった中英語に出現したと言われている (van der Gaaf, 1927; 中尾, 1972)。しかし、後置属格は、of 属格と同じ「A of B」の形式をとるが、of に属格名詞句・所有代名詞が後続する、後続する名詞は有生 (animate) でなければならない、等の of 属格には観察されない特徴を持つ。本発表では、後置属格は通常の of 属格とは一線を画する構造であり、古英語・中英語に存在した二重決定詞 (*a my friend*) と呼ばれる構造から独自に発達したと主張する。史的コーパスを用いた調査より、後置属格と二重決定詞との間に観察される相関関係を示し、den Dikken (2006) の理論的枠組みを採用して、Ibaraki (2010) の属格の格付与の発達の観点より説明を試みる。

## 研究発表・要旨

第1室(イギリス文学) 人文学部1階 101教室 司会 鈴鹿医療科学大学教授 服部 厚子

### 第2発表

『十二夜』における異性装とジェンダー・クライシス

名古屋大学大学院 谷ノ上 千奈美

Thomas DekkerとThomas Middletonによる*The Roaring Girl* (1611)の主人公Mollは基本的には周囲から女性として扱われており、彼女自身も自分の「ジェンダー」を女性と規定している。一方でその服装ゆえにJackという男性名で呼ばれたり、男性であると周囲から評されたりすることも少なくない。同作品に登場するMaryも男装をする場面があるが、その服装のみによって彼女は男として扱われる。William Shakespeareの*Twelfth Night* (1602)で異性装を行うViolaの場合、彼女が意識する「ジェンダー」は女性であるが、彼女は男性(Cesario)として振る舞う。ViolaとMollやMaryにおける決定的な違いとは、衣装の中の身体、生物学的な性が女性であると知られていない、知られているにもかかわらず、異性装によって彼女たちの規定するものとは異なる「ジェンダー」で認識されることにある。

本論では、*The Roaring Girl*と*Twelfth Night*を比較し、二つの作品にみられるジェンダー同定の類似点と相違点を、近代初期英国におけるジェンダー・クライシスの視点から照射したい。

### 第3発表

*The Jew of Malta*におけるBarabasの財宝欲とマキャヴェリズム

名古屋大学大学院 奥山 厚子

Christopher Marlowe作*The Jew of Malta* (1591年頃初演)に登場するユダヤ商人Barabasを取り上げる。作者は残虐性と家族愛の欠如を強調したBarabasの言動によりカトリック教徒の偽善を浮かび上がらせている。本発表では作者がBarabasに映し出そうとしたものについて述べたい。本劇の基調は限りない財宝欲である。ローマ・カトリックに対する批判のためにユダヤ人が都合よく使われている。Marloweの死は暗殺ではないかと言われているが、エリザベス朝は既成概念や権力に逆らって生きるのは危険な時代であった。*The Jew of Malta*には至る所にMachiavelliの『君主論』を意識したと思われる台詞が見られる。『君主論』は当時の聖書中心の道徳律から逸脱し、現実的対処の必要性を重んじた思想であったため、様々な解釈が生まれた。自身の欲の実現のため娘を含め次々と人を殺すことも厭わない大悪党に、あえてマキャヴェリズムを誇大解釈して語らせることによりMarloweが表現しようと試みたものについて検討する。

## 第2発表

## イーヴリン・ウォーと第二回ヴァチカン公会議

名城大学非常勤講師 有為楠 香

本発表では、1962-65年に開かれた第二回ヴァチカン公会議が、イギリス人作家イーヴリン・ウォー(1903-66)の晩年の生き方、そして作品に与えた影響を論じる。イーヴリン・ウォーは1930年に改宗したカトリックであり、生涯に渡って彼の作品群にはとくに濃いカトリックの影響が見られる。しかし、彼が絶対の信頼を置いていたヴァチカンにおいて、教皇ヨハネ23世の名の下に召集された公会議は、様々なカトリックの規範の見直しと改正を行うものであり、それらにウォーは大変な憂慮を抱いていた。だが彼はその不安を、晩年において自らの信仰の起源を見直すという実践に変えた。公会議の進捗と並行してウォーが行った、大著『名誉の剣』の結末部分の重要な改訂からそれを探ると共に、それに至る作家の意図、およびウォーが重要視していたキリスト教会の「首尾一貫性と持続性」をより明確にすることが本発表の中心となる。

## 第3発表

*The Bachelors* における 'stranger' としての Ronald

弘前大学講師 畑 中 杏 美

Muriel Spark (1918-2006) による第五作目の小説 *The Bachelors* (1960) は、Sparkの他の小説とくらべると、やや陳腐な小説であると言われることがある。たしかに、作中における心靈主義を異端的な宗教の一種とし、それを信奉する者たち、そして彼らに祀り上げられる霊媒の Patrick Seton を批判されるべき悪と考えるならば、Patrick と対比される Ronald Bridges は、カトリックという普遍的価値観、ひいては作中における悪に対峙する善を体現したキャラクターであるように思われる。しかし、Ronald は必ずしも Patrick の対極に位置する人物ではない。癲癇の発作が起きた時の Ronald の姿がトランス状態にある Patrick の姿とよく似たものとして描かれることからわかるように、むしろ Ronald は Patrick と同様に、悪魔的な側面を持ち合わせている人物ですらあり、'stranger' を自称する者でもある。本発表では、*The Bachelors* における Ronald の役割を 'stranger' という言葉に着目して検証したい。

## 第1発表

## シャーロット・ブロンテの小説における兄弟間の確執のモチーフとその起源

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野 百合

シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-55) 小説の三大モチーフとして挙げられるのは、「孤児」、「主従関係」そして「兄弟間の確執」であるが、この三つ目のモチーフの起源について検証する。このモチーフの起源は弟ブランウェル(Branwell Brontë, 1817-48) の作品『羊毛は高騰す

る』(*Wool is Rising*, 1834)に登場するアレクサンダー・パーシーの二人息子である繊維業を営む兄とその下で酷使される弟にあるとされている。シャーロットはこの兄弟間の確執を初期の習作『アッシュワース』(*Ashworth*, 1840)において変容させ、没後出版された『教授』(*The Professor* 執筆1846、出版1857)におけるクリムズワース兄弟間の確執へとさらに変容させた。本発表では、モチーフの生みの親であるブランウェルの『羊毛は高騰する』と『アッシュワース』やその他のシャーロットの初期作品に登場する兄弟のモチーフを分析し、その背後に潜む父親の息子嫌いについて検証する。

## 第2発表

### The Moral Dilemmas of the Hero Thiodolf in William Morris's *The House of the Wolfings*

名古屋大学大学院 秦野康子

William Morris (1834–96) is well known for his designs as an artist and craftsman. Much less attention has been paid to his literary books written in his late years, even though they have been referenced as forerunners of modern fantasy. These stories, set in remote places and distant past, are called romances, compared with novels written by his literary contemporaries. Morris aims at effects of a form of sharp contrasts. Morris's 1889 romance *The House of the Wolfings* is about a hero, Thiodolf who has been adopted into the House of Wolfings and leads a war against the invading Romans. The hero's heart is divided between his lover Wood-Sun and the House. His decision to die for the cause of the tribe finally makes him achieve integration with his fellows in the gens and secure the continuation of the House.

This presentation explores *The House of the Wolfings* in terms of the style, language use, and narrative, in order to analyse how the story depicts the hero's life-and-death dilemma between his loyalty to the kindred and desire for personal survival. Thus effective use of the traditional style of romance made in the portrayal of the hero's dilemmas will be examined.

---

## 第4室(英語学) 人文学部2階 第3講義室 司会 名古屋工業大学教授 吉田江依子

## 第1発表

### 動詞句内要素の等位接続について

北海道教育大学准教授 梶本顕士  
福井大学准教授 中村太一

一般に、等位接続される要素は同じ統語的特徴(範疇等)を持つものに限られるが(Chomsky (1957)、Williams (1981)他)、反例も多く存在する。例えば自他交替を示す動詞eatは、動詞句内要素の目的語(NP)と付加詞(PP)をそれぞれonlyで修飾した上で等位接続することが可能である。本発表では、新たな発見として、使役交替が可能な動詞worryも同様に反例となるだけでなく、この場合、eatと異なり、等位項間の順序に関する制限が働くことを指摘する。eatの場合、等位接続された目的語と付加詞の順序は自由である。一方、他動詞worryの場合、目的語を第一等位項にし、自動詞worryのabout句を第二等位項にすると容認されるが、逆は容認されない。この非対称性がNakamura and Sugimoto (2015)における動詞句削除に見られる制限と類似しているこ

とを指摘した上で、当該の等位接続には、動詞句の等位接続と省略による派生が関与すると提案する。この提案により、動詞 eat と worry が異なる振る舞いをする事が説明されると論じる。

---

第4室(アメリカ文学) 人文学部2階 第3講義室 司会 名城大学准教授 柳 沢 秀 郎

---

第2発表

日米における国民作家フォークナーの創生

—*Faulkner at Nagano* からみる合衆国の文化外交戦略とその受容—

中京大学教授 森 有 礼

ノーベル文学賞作家ウィリアム・フォークナーは、1955年に合衆国国務省の企画で日本を訪れ、日本の文学研究者や作家達を相手に多くの講演会や対談を行い、非常に好評を得た。*Faulkner at Nagano*はその記録をまとめたものであるが、冷戦期における合衆国の文化外交の一環として同書を吟味してみると、フォークナーが文化使節として、当時の日米両国にとって政治的に極めて重要な役割を果たしたことが分かる。

本発表は *Faulkner at Nagano* を採り上げ、フォークナーが合衆国、ひいては日本が求める国民作家像を提供していたことを論じる。具体的には、同書の中にフォークナーがしばしばまとめた「老賢者」や「素朴な農夫」といったペルソナをたどり、それが「老賢人の知恵を求める若き日本」という戦後の日本復興の精神的スタンスの形成に寄与したことを論証し、冷戦期の合衆国の文化戦略と、日本のアメリカ文学研究との共謀関係について考察したい。

第3発表

ロスト・イン・トランスレーション(翻訳において失われるもの)

—『ティファニーで朝食を』の場合—

金城学院大学教授 楚 輪 松 人

翻訳されると何かが失われてしまう。1959年、アメリカの詩人のロバート・フロスト(1874-1963)は、詩人たちが集まったシンポジウムでこう発言した。“I could define poetry this way: it is that which is lost out of both prose and verse in translation.”(詩は次のように定義できる、つまり、翻訳されると散文からも韻文からも失われるもの、それが詩だ)。アメリカの小説家カポーティ(1924-84)の中編小説『ティファニーで朝食を』(1958)は、1961年、A. ヘプバーン(1929-93)主演でパラマウント映画によって映画化された。主題歌「ムーン・リバー」、ジバンシイの衣装、高級宝石店ティファニーは観客の脳裏に鮮烈なイメージを残した。しかし、本発表では翻訳によって得られたものの検証ではなく、原作のテキスト、およびコンテキストに立ち返り、映画への翻訳によって失われたもの、具体的にはホリー・ゴライトリーが表象したものは何であったかを検証していきたい。

## 大会関係役員一覧

|         |                |
|---------|----------------|
| 支部長     | 宮 地 信 弘 (三重大学) |
| 副支部長    | 鈴 木 達 也 (南山大学) |
| 支部選出評議員 | 滝 川 睦 (名古屋大学)  |
| 支部代表理事  | 内 田 恵 (静岡大学)   |
| 事務局長    | 小 田 敦 子 (三重大学) |
| 事務局長補佐  | 野 田 明 (三重大学)   |
| 書記      | 西 村 秀 夫 (三重大学) |
| 監事      | 中 川 直 志 (中京大学) |

### 大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

#### 英文学

|                   |
|-------------------|
| 内 藤 亮 一 (富山大学)    |
| 川 津 雅 江 (名古屋経済大学) |
| 丸 山 修 (静岡大学)      |

#### 米文学

|                 |
|-----------------|
| ◎杉 野 健太郎 (信州大学) |
| 柳 沢 秀 郎 (名城大学)  |
| 竹 腰 佳誉子 (富山大学)  |

#### 英語学

|                   |
|-------------------|
| ○二 村 慎 一 (愛知淑徳大学) |
| 柳 朋 宏 (中部大学)      |
| 石 川 一 久 (愛知学院大学)  |
| 吉 田 江依子 (名古屋工業大学) |

### 開催校大会準備委員

|         |
|---------|
| 小 田 敦 子 |
| 西 村 秀 夫 |